

エッセイ

## 幼い頃の忘れ得ぬ味

浦野 裕司

### 冷めたビフテキ

「あの時のあの味は最高だった」と思える食べ物の記憶が、今も鮮明に残っている。最初に「この上なく美味しい」と感じられたのは、冷めたビフテキである。

当時の住まいは、父の勤める会社の寮の一室だった。八畳一間にタンスやテレビ、冷蔵庫に学習机、はたまたミシンまで。家財道具のほとんどが狭い部屋の中に納まっていた。今にして考えれば、よくもまあ、四人家族がああ部屋で暮らせたものだと思える。

大はしやぎする私の尻を、母がピシヤリと叩いた。

さて、冷めたビフテキのことだ。寮で暮らすのは、ほとんどが独身社員だった。そのため寮内には独身社員のための食堂があり、母はパートタイムで朝食・夕食の調理をしていた。寮には集会施設もあり、時おり、会社のお偉いさんのための宴会が催された。母は宴会も手伝うことがあり、宴会がお開きになると目ぼしい残り物を持ってきてくれた。夕食抜きで耐えていた私には、すべての料理が美味しかった。

その中でも最高のご馳走がビフテキ。当時の我が家で肉と言えば豚肉か鯨肉で、牛肉を口にする機会など皆無だった。「ビフテキ」という言葉には、行ったことも見たことも無い異国の響きを感じられた。冷めて硬くなった残り物のビフテキだったが、「こんなに美味しい肉があるんだ」と驚いたのを、昨日のことに覚えている。同じ肉なのに、豚肉や鯨肉とはまったくの別物。噛みしめるほどに遠い異国が感じられ、飲み込むのがもつたないほどだった。

大人になってようやく口にすることができた霜降り肉のすき焼きも、本場神戸で食べたビーフステーキも、あの時の冷めたビフテキには敵わない。

調理と洗濯を、母は廊下の流しで行っていた。ある日、部屋の前の廊下に洗濯機が届いた。洗濯板から洗濯機へと選手交代した画期的な日だった。手回し式の絞り機のローラーから洗濯物がスルメのようにになって出てくるのは、見ているだけでも楽しかった。しかし、やってみる方がもっと楽しい。よく手伝いを買って出たものだ。ローラーに挟み込む洗濯物が厚すぎてハンドルを回せなくなったり、うっかりボタンを割ってしまったりしたものも懐かしい。翌年の夏には、八畳間の床の間に冷蔵庫が鎮座した。扉を開けて頭を突っ込み「涼しい、涼しい」と

### 焼き芋はアルバイトで

八畳一間の寮から、六畳二間・台所付きの住宅に引越したのは小学二年生の冬。こんなに広い家に住めるんだと嬉しくて仕方なかった。風呂は無かったが、近くに銭湯があり、銭湯通いも楽しかった。初めてアルバイトをしたのはその頃だ。アルバイトと言っても、誰に雇われたわけでもない。一人でこつこつと仕事に励んだ。もちろん親には内緒だ。

東京オリンピック後の昭和四十年代初頭、開発の波は都心部から郊外へと移っていた。住宅があつた府中の町でも、あちらこちらで道路工事や電柱工事などが進んでいた。おかげで道端には鉄板の切れ端や針金、銅線など、「宝物」がたくさん落ちていた。学校から帰ると、玄関にランドセルを放り投げて近所の原っぱへ走る。そこで野球をするのが日課だったが、遊び仲間が集まらない時はアルバイトに励んだ。家の近所を一時間ほど歩き回り、鉄屑を拾い集めるのが仕事だ。

鉄屑を引き取ってくれたのは、屑屋のおじさんである。当時はまだ「くずくずい、おはらくずい」という呼び声で回

る、屑屋と呼ばれる商売が残っていた。時はまさに高度経済成長の真つ只中。金属の値は高騰し、子どもが拾う針金でも、少し集まれば十円、二十円という値で引き取ってくれた。銅線やアルミ線には高い値段がついた。

ある時、よい考えを思いついた。薬をしようと、磁石に紐を結んでズルズルと引きずり、お宝を集めようとしたのだ。だがこの作戦は失敗に終わった。ごく稀に短い針金がくつつくこともあったが、自分で拾った方がはるかに効率的。道行く人には変な目で見られる。それに高値で売れる銅線やアルミ線はまったくダメだ。鉄は磁石にくつつくが、銅やアルミニウムはつかないことを知ったのはこの時だ。学校で習うよりも少し前。失敗はしたものの、理科の予習にはなった。

この頃経験した意味の無さそうなことは、学校では学べない貴重な体験になった。野球で民家の窓ガラスを割っても、横一列に並んで帽子を取り、深々と頭を下げ「すみませんでした！」と謝れば許してもらえないこと（道徳）。万年塀の上から飛び降りても大丈夫だが、屋根から飛び降りると踵を痛めてしまうこと（保健・体育）等々。数え上げればきりが無い。

話が逸れてしまった。アルバイトで稼いだお金の使い

道のことだ。目的はただひとつ。おやつを買うため。両親はめったに小遣いをくれなかったので、鉄屑集めで得られるアルバイト代は貴重な収入だった。

十円が手に入ると、それを握りしめ駄菓子屋へ走る。苦勞して手に入れた十円玉で、五円の駄菓子なら二つ買える。得体の知れない駄菓子でも、夕飯まで我慢できさうも無いすきつ腹を少しは慰めてくれた。

二十円稼ぐと、たぬき屋という名の菓子屋へ。まだスナック菓子と呼べるようなものなどほとんど無い頃だ。店頭には一枚いくら、グラムいくらの量り売りのお菓子が、大きなガラス瓶やガラスの蓋つきの木箱に入って売られていた。一番のお目当てはポテトチップス。「二十円ください」と伝えると、たぬきのような風貌の店主が、秤で量って白い小さな紙袋に入れる。その袋の両端を持ってくるくると回し、口を閉じて渡してくれる。魔法のごときその「くるくる」を見るのが好きだった。家に帰ると、逆回転でくるくると回して袋を開け、一枚一枚、ゆっくり味わう。食べ終わると、油のついた指先を紙袋でちよちよいと拭いてから小さく丸め、ゴミ入れの下の方へ突っ込み証拠を隠滅。唇や歯に青海苔が付いていないか鏡で確認。「袋よし！青海苔よし！」と指

差し喚呼して終了だ。宿題が残ってはいるが、「ああ、今日もいい一日だった」と満足感に浸れるひと時だった。三十円の高収入を得た冬の夕暮れには、焼き芋屋さんを待った。「石やぐきいも、やきいも」とリヤカーを引いてくるおじさんの元に駆け寄り、「三十円分、焼き芋ください」と声をかける。おじさんは「うん、三十円分かあ」と、少し困ったように呟きながら焼き石をかき回す。ようやく小さな芋を見つけて取り出すと、「はい三十円の焼き芋」と言って新聞紙に包んで渡してくれた。握りこぶしほどのかわい焼き芋だったが、それは私のおやつ遍歴の中でもとても高いレベルに位置する。

### 銀座ウエストの焼き菓子

焼き芋を超える最高ランクの思い出の味は、銀座ウエストの焼き菓子だ。

父は、ある機械メーカーで運転手をしていた。高級車に重役を乗せ、自宅と会社間の送迎、営業所回りなどが通常の勤務。それ以外に平日は、接待のために深夜まで残業、日曜日はゴルフ場へと、夜も休日も働き詰めだった。

接待はほとんど銀座のクラブ。クラブに重役を送り届け、接待が終わる深夜まで駐車場で待つ。いつ果てるとも知れぬ宴を、車内で煙草を燻らせながら待つ時間は長く辛かったようだ。父はいつも「胃が痛い」、「胃が痛い」と言っていた。銀座の接待で深夜に帰宅した翌朝も、早朝から重役の自宅まで迎えに行く。そういう日が続くと、父は不機嫌で怒りっぽくなるのが嫌だったが、たまに持ち帰るお土産は楽しみだった。

当時の銀座のクラブのママは、客の運転手への心遣いも忘れなかった。接待が長引いた時には、酔った重役を抱えて車に乗せようとする父に、「お子さんに」と言っ手土産を渡してくれた。その手土産の定番が、銀座ウエストの焼き菓子だった。駄菓子に慣れ親しんだ私の舌に、この世のものと見えぬ至福の時を与えてくれた。幾種類もある焼き菓子の中で、最初に無くなるのはリーフパイかアーモンドスライス入りのチョコクッキーだった。子どもの頃食べた銀座ウエストの焼き菓子の味は、私にとつて洋菓子の味の良し悪しを決める基準となっていた。未だにそれを超える洋菓子に出会えないのが寂しくもあり、少し嬉しくもある。